

クラインの壺

岡嶋二人



岡嶋二人

新潮社



●新潮ミステリー倶楽部特別書

じまふたり) ●発行・1989年

者・佐藤亮一 ●発行所・株式会社新

71/振替東京4-808/電話・業務部

66) 5411 ●印刷所・東洋印刷株式

格はカバーに表示してあります ●乱丁・落

お送り下さい。送料小社負担にてお取替えい

© Futari Okajima 1989, Printed in Japan

下ろし ●クラインの壺 ●著者・岡嶋二人 (おか

10月25日 ●3刷・1990年3月25日 ●発行

潮社・郵便番号162東京都新宿区矢来町

03(266) 5111・編集部03(2

会社 ●製本所・大口製本株式会社 ●価

丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛

たします。



ISBN4-10-602715-1 C0393

¥ 1300

クラインの壺

著作権使用契約書

著作権者上杉彰彦を甲とし、株式会社イブシロン・プロジェクトを乙として、著作物「ブレイン・シンドローム」の著作権使用に關し、左記の通り契約を締結した。

第一条 甲は乙が契約締結の日より五年の間、著作物を遊戯装置「KLEIN-2（仮称）」のためのプログラムの原作として使用し、全国遊戯施設においてこれを営業販売することを承諾する。

第二条 甲は乙が本契約に基づく遊戯プログラム・ソフト及び遊戯装置のために、著作物を使用して各種宣伝材料を作成し、使用することを承諾する。

第三条 乙は甲に対し、前二条の著作物のための著作権使用料として、
一金貳百萬圓也（税込）

を本契約締結の日より一箇月以内に支払う。

第四条 甲は本契約締結の日より五年の間、乙以外の者に著作物をゲーム、映画、テレビ放送、ラジオ放送、演劇、出版物などの二次的著作物に自ら使用し、もしくは他人をして使用させることを許可しない。

第五条 甲または乙が、本契約に定めた事項に反したときは、他の一方は本契約を解除



し、損害を受けたときは損害賠償の請求をすることができる。

第六条 第一条に定める期間以後の著作物使用については、乙は甲に対し文書による承諾を求めなければならない。そのときの著作物の著作権使用料は、そのつど甲乙協議するものとする。

第七条 本契約に定めなき事項については甲乙協議の上、誠意をもって解決するものとする。

本契約を証するため、同文二通を作成し、署名捺印の上、甲乙各一通を保有する。

平成三年二月十日

甲 東京都世田谷区新町四ノ一二ノ七 福沢荘八号室

上杉 彰彦 

乙 神奈川県川崎市高津区溝の口二〇一五

株式会社 イブシロン・プロジェクト

代表取締役

世森 貴美子 



実際、こんなものが証拠として役に立つのかどうか自信はないのだが、ともかく僕がイブシロ
ン・プロジェクトと取り交わした契約書を、このノートの最初のページに貼りつけておくことにす
る。

必要なら、ていねいにノリをはがし、科学検査をしていただきたい。そうすれば、この契約書が
本物であることを納得してもらえと思う。

たとえば、僕の署名から約二センチ五ミリほど下のあたりに注目してほしい。そこに、ほんやり
と霞んだような汚れがある。それは僕の左人差指の指紋の一部である。署名をする前に、契約書の
脇に置かれていた新聞の余白に万年筆の試し書きをやった。その時インクが指についたのを知らず
に、僕は自分の名前を書いたのだ。捺印しようとして、その汚れに気がついた。あらためて書き直
しをしましょうか、と申し出たが、たいしたことじゃない、と言われ、それがそのままになってい
るのである。

指紋は僕以外のものも発見できるはずだ。時間の経過がそれらを消し去っていなければ、この契
約書からは、少なくとも僕の外に二人の人物の指紋が検出されるだろう。

その一つは梶谷孝行（わじたなかみ）という男のものである。梶谷はイブシロン・プロジェクトの営業企画部長だ

が、僕は彼からこの契約書を渡された。

「ここに名前ですね。名前の下に捺印と、それから契約書二枚にまたがるように割印をお願いします」

言いながら、梶谷は僕が書き込みをすべき場所と印鑑を押す場所を指で押さえた。だから、彼の指紋はあちこちについている。

もう一つは敷島映一のものである。彼は、僕の義兄だ。僕は、この契約書を姉のところに持って行って見せた。とにかく、自分の作品がゲーム化されるという事態は、僕にとって大事件だったのだし、この快挙を誰かに見てもらいたくて仕方なかったのだ。姉の邦子は、僕が訪ねた時、ちょうど夕食の仕度をしていた。濡れた指で触ったらいけないからと、邦子は映一さんに契約書を持ち上げさせて、その文面を眺めたのである。残念ながら、だから彼女の指紋はついていない。

指紋だけではない。以前、何かの本で、汗や唾液で血液型がわかるというようなことを読んだ覚えがある。梶谷孝行が書類をめくる時に、親指をなめるクセがあったかどうか、それは定かではないが、ことによれば、この契約書の隅に彼の唾液を発見できる可能性だってないとは言えないのだ。だから、詳細な検査してもらえれば、これが本物の契約書であることは証明できると思う。なにかが、彼らに「契約など知らない」と言わせたとしても、この契約書はイブシロン・プロジェクトと僕の関係を確実に証明してくれるはずである。嘘を言っているのは僕ではない。僕の言葉を嘘にしてしまおうとしている連中の言っていることこそ、嘘なのだ。

僕は、今逃がっている。

ここは山の中の古い建物で、おそらく誰かの別荘だろう。建物の裏に積み上げられた薪にはびつしりと苔が生し、玄関の脇に倒れている自転車は錆びついて鉄屑同然になっている。たぶんここは

最近、まったく使われなくなっているのに違いない。その屋根裏部屋で、僕はこれを書いている。

最初は雨を避けるつもりでベランダの下に潜り込んだ。雑草を分けて、じとじとした土の上を這って進むと、亀裂の走るコンクリートの壁に突き当たった。その壁に五十センチ角ほどの小窓が開けられ、網を張った木枠が外れそうに傾いている。木枠は、つかんで引くと簡単に取れた。クモの巣を払うと、五十センチ角の穴の向こうにひね曲がった三枚の鉄の羽が見えた。換気扇だと気づき、試しにその羽を足で蹴ってみた。大きな音がして、鉄の羽は暗い穴の奥へ落ちた。僕は、そこから建物の中へ入った。

入ったところは機械室のようだった。小型のボイラーがコンクリートの床に置かれ、錆びたパイプを這わせた壁の向こうにドアがあった。床も壁も水に濡れている。音はどこからも聞こえなかった。ドアを開けると、そこは地下の貯蔵庫らしく両側の壁に木の棚が巡らせてある。棚には湿気でぶよぶよになった段ボールの箱が不揃いに並んでいた。箱の隙間から逃げ出したネズミに驚いて、僕はそちらへ伸ばしかけた手を引いた。

狭い貯蔵庫の奥に階段があり、そこを上がると一階の廊下に出る。廊下の左側が調理場で、右は居間だった。廊下はそのまま進めば玄関に通じている。

建物すべてを探検するには、十分もかからなかった。二階建で一階は居間と和室と食堂、二階は二つの寝室があるだけだ。奥の寝室の壁に梯子が取り付けられていて、この屋根裏部屋は、それを上ったところにある。四畳程度の小さな部屋だが、窓からの眺めは一番だった。

渓谷に向かって滑り落ちていくような緑の斜面や、その向こうの山の連なりはもちろんのことだが、なによりもこの窓からは建物の前に通じる道が見える。誰かが山を上ってくれば、ここからならすぐにわかる。県道から岐れた山道が、川に沿って尾根まで続いている。たまに、山のふもとから町の人間が小型のトラックで上って行くのと、ハイキングの男や女たちが尾根を目指してゆつく

りと歩いている他は、まず人の姿はない。まして山道からここへ通じる脇道に入ってくる者など、誰もいなかった。

僕は、ここが気に入った。もう一度地下へ下り、換気扇の穴から建物を出ると、町へ行つて食料とノートを買つて来た。屋根裏部屋の窓の下に机と椅子を運び、そこにこのノートを拡げて置いた。目を上げれば、真下に山道が見える。誰かがやつて来たとしても、ノートを持ち、地下へ姿を隠すだけなら三分もかからない。

ひと月ぐらいここで過ぐすのに必要な食料を確保する金はあるし、それだけの時間があれば、僕の体験を綴り終えるには充分だろう。

さて、どんな具合にはじめたらいだろうか。

結果がどうなるにしろ、現在の僕には、こうして自分の体験をなんらかの形にとめておくしか方法がない。そこに、どれだけの意味や価値があるのかは知らない。意味や真実をさぐることはもう疲れ果てた。意味をたぐれば、またあの堂々巡りがはじまるだけにきまつている。

さしずめ、今の僕は、自分の尻尾をくわえた蛇みたいなものだろう。ぐくりぐくりと自分自身を呑み込み続ける青大将だ。

呑み終えた時、そこには何が残るのだろう。皮膚と胃袋が裏返しになった自分の姿だろうか？それとも、なにもかもが消え失せ、それでも呑み足らないと思ひ続ける意識だけになつてしまふのか？

たぶん今の僕にとっては、そこに食べカスの一つでも残っていることを期待するしかあるまい。

プロトタイプのことからはじめよう。

それは、手袋か、あるいはナベつかみにコードをつないだもののように見えた。肘のあたりまである長い銀色のナベつかみだ。触つてみると、光沢のある表面がほんのりと暖かい。液体が詰まっているのだろうか、押さえた指をドロンとしたものが内側から押し返す。

「手を入れるんですか？」

訊くと、百瀬^{ももせ}伸夫がうなずいた。

僕は研究室を見渡した。その部屋には窓がなかった。奥へ七メートル、幅は四メートルほどの広い部屋だが、廊下へ通ずるドア以外はすべてがコンクリート剥き出しの壁で囲まれている。

僕の座った椅子の両側には、二人の男がいた。右隣に腰を掛けているのが百瀬伸夫で、左に立っているのは梶谷孝行という男だ。僕は梶谷の案内で、この研究室にやってきた。ここに来たのはこれがはじめてだった。

僕は、機械を山のように積み上げた大きなテーブルの前に腰掛けさせられている。腕を出してくれと言われ、Tシャツの右腕だけ、まるで注射をされる時のように肩までまくり上げている。二人の男は、ニヤニヤと笑いながら、僕の反応を眺めていた。

「手を入れるとどうなるんです？」

訊くと百瀬が首を振った。

「とにかく、入れてごらんなさい。説明するよりも実際にやってみたらほうが早いから。危険な

んかありませんから」

「……………」

僕は長いナベつかみを手に取った。太いコードがミトン型に合わさった指の先あたりから機械のほうへ伸びている。手前にディスプレイが置かれていて、そこにグラフのようなものが表示されていた。十字に座標を切った真ん中に円形の緑色の線が震えるように動いている。見ると、僕がナベつかみを手に取った瞬間、グラフの円が大きく揺らいでグニャグニャと変形した。

僕はゆつくりと右手をナベつかみの中へ差し入れた。中は生暖かく、なんとなく湿っているような感じだ。

「指の根元まで、しっかりと入れて下さい」

百瀬がディスプレイのグラフを眺めながら言った。グラフの円がクネクネと動いている。僕の手の動きに連動しているのだということが、見ていてすぐにわかった。

ナベつかみの奥は、完全な手袋だった。指の位置を一本一本確かめながら、言われた通り根元まで差し込む。

「きつい感じですか？」

百瀬が訊き、僕はうなずいた。

「ピチピチのゴム手袋をしてるみたいですね」

「今、調整します」

言って、百瀬はディスプレイに目をやりながらキーボードの横のボリューム・レバーをゆつくりスライドさせた。放送局のスタジオに置いてあるようなレバーだ。

「あ……」不意に指をしめつけている力が消えて、僕は声を上げた。「ゆるくなった」

「ええ、なにかに触れているという感覚が指にありますか？」

「はい、少し。でも、ほとんどゆるくて触っていないような」

「このぐらいかな」

百瀬は、また少しレバーを動かした。

「……………」

なにかとても奇妙な感覚を、僕は自分の右手に感じていた。手袋が、僕の手の表面から消えてしまったような感覚だった。いや、確かに僕はそのナベつかみのようなものの中に右手を入れているところが、手に当たるものがなにも感じられない。

見ると、ディスプレイのグラフは、ほぼ完全な円に変化していた。指を動かしてみても、グラフはさきほどのようには曲がったりしない。

「抵抗がどこかにありますか？」

「ないと言うか……あると言うか」

「ある？」

「いや、気持ちのほうの抵抗ですけど」

百瀬が笑った。横にいた梶谷孝行も、ニヤニヤと笑っている。

「熱いとか、冷たいといった感じがありますか？」

百瀬が訊いた。

「ちよつと生暖かい感じかな」

「これだと？」

と、百瀬はさきほどと別のレバーを操作した。

「……………」

そのレバー操作につれて、僕の右手が冷たくなった。

「冷たい？」

「ええ」

「これは？」

レバーを逆に操作する。すると、自分自身の手が熱を持ったように暖かくなってくる。

「あの……それで、温度調節を？」

百瀬がうなずいた。

「一番自然なのは、これだね？」

レバーの横についているボタンを押した。すると、すっと熱がひき、僕の右手はまたなにも感じていない状態になった。

「……これは、いったいどういう装置なんですか？」

「K1のテスト用のプロトタイプ」

「え？」

百瀬の言葉の意味がつかめず、僕は訊き返した。

「テスト用に作った試作品なんです。感覚のシミュレート装置というか、そんなものですね。完成品はK2というのができてるけど、まだちゃんとした名前がついてない」

「感覚のシミュレート……？」

「そう、今のは温度の感覚ですよ。このプロトタイプは、手が感じるすべての感覚を擬似的に体験できるように作られている。そうだな……たとえば」と、百瀬は今度はキーボードのほうに向かった。キーを打つとディスプレイの表示がグラフから表のようなものになる。「こうすると、どんな感じがしますか？」

キーを百瀬が叩いた途端、僕はまた声を上げた。

「水が出てきた！」

百瀬がプロトタイプと呼んだナベつかみの中に、突然水が湧き出したのだ。

「いや、違いますよ」百瀬は笑いながら首を振った。「手を水に浸しているような感じがするでしょう？」

「……ええ」

僕はナベつかみの中で指を動かした。右手だけが、水槽の中にでも入っているような感覚だった。指を動かすと、確かに冷たい水の動きが感じられる。

「それはシミュレーションなんですよ。装置に水が入ってるわけじゃない。上杉さんの皮膚が、そういう刺激を受けているだけなんです」

「……………」僕は、百瀬を見返した。「水は、ないの？」

「ありません。ほらね」

と言いながら、百瀬はまたキーボードを打つ。途端に右手が感じていた水が、どこかに消えていった。手には、濡れたような感覚もない。

「……なんだか、気持ちわるい」

「もう一つだけ試してみましよう。手を握ってみてください」

「握る？」

「ええ、グーにしてみてください」

「……………」

僕はナベつかみの中で手を握った。なんの抵抗もなかった。左手が握ったのと同じように、僕の右手は拳を握る。

ふと、おかしいことに気づいた。

「わかりますか？」

微笑みながら訊く百瀬に、僕はうなずいた。思わず唾を飲み込んだ。

「指が、直接触ってる……！」

ナベつかみの存在が、少なくとも右手の感覚から消えていた。確かに指は手袋の中に入れているはずなのに、指と指同士は直接に触れ合っている。指をこすり合わせてみた。まるで手袋の感覚は失せていた。

「そうです。それもシミュレートなんです。上杉さんの指は、今、装置の膜に包まれている。だから、通常では指と指、指と掌が直接触れ合うことはないはずですね。事実触れ合っていない。でも、そのように上杉さんは今感じている」

百瀬の言う通りだった。僕は今、右の親指と人差指をこすり合わせている。外側から見ている以上、指と指の間には少なくとも一センチの隔たりがある。ところが、僕の指はそのナベつかみの厚みを通り越して、じかに触れ合っているのだ。

「どうしてこんなことが起こるんですか？」

「このK1やK2というのは、人間の身体に直接、入出力を行なう装置なんです」

「身体に入出力？」

「そうです。装置は今、上杉さんの右手の体温、発汗、筋肉の緊張と弛緩——そういった様々なデータを刻々とコンピュータに送り込んでいます。それが入力ですね。出力は逆に、上杉さんの右手に情報を伝えるんです。この手袋には特殊な液体が封入されています。微弱な電圧を掛けることによっていろんな状態に変化する液体です。固くなったり柔らかくなったり、熱を帯びたり、逆に冷えたり。それが上杉さんの皮膚を刺激する。まるで水の中に手を入れたような感覚を作ることさえすれば、実際には存在しない何かをつかませることもできる」

「存在しない何か？」

「やってみましょうか」言いながら、百瀬はキーボードを叩いた。そして、振り向くとテーブルの上を指差した。「このあたりに、目には見えないある物を置きました。それを取り上げてみて下さい」

「……どうということ？」

「このあたりです」と、百瀬はまた指でテーブルを示す。それは、僕のちょうど正面だった。「私にも正確な位置はわからない。見えませんからね。でも、上杉さんの右手にとっては、そこに存在しているはずです」

「……………」

言われた通り、僕はナベつかみの右手をそのあたりへ移動した。僕の指は、ナベつかみを素通りして、直接テーブルの表面を撫でていた。これは、じつに奇妙な感覚だった。眼で見ていることと右手が感じていることがまったく違うのだ。

「あ」

指がなにかに触れて、僕はテーブルに目を凝らした。

何もない。しかし、人差指の腹は、確かになにか硬いものに触れていた。金属の感触だった。薄っぺたい金属の板のようだ。

取り上げてみた。僕の右の人差指と親指が、目に見えない金属の薄い板をつまんでいる。

「目を閉じてみると、それが何かわかるでしょう」

百瀬が言い、なるほどと思って僕は目をつぶった。

金属の板は細長かった。一方の縁にギザギザがある。

「鍵だ……！」